



昨年は妻・千代野が倒れて20年目。アクシデントは家族、職場、友人関係など人生を一変させます。それまでの普通の生活が普通でなくなる。一つひとつの事柄を、これまで通り過ごすにはどうしたらいいか？ まず目の前の障害者を支える家族の力。正確に言えば専念できる家族の数、つまり大家族かどうか？ 次に障害者を支える制度施策があるかどうか？ もし、これらがなければ「福祉を金で買う」財政力が家族にあるかどうか？ このすべてがなければ、その家族は路頭に迷い、崩壊の道しか残されません。つまり、目の前の家族だけで解決しようとする、普通でない異常な運命が待っています。これまで通りの暮らしを続ける方策はないか？ 金も、制度もなければ残されたのは、人の力しかない、と、開き直りました。親友、知人、あげくの果ては初対面の人にも。SOSを出すには、隠しごとをせず率直に訴えることが最低の礼儀だとも思いました。当然相手の困惑、嫌みはぐっと飲み込むしかありません。男のくせにと見栄を張ってもなんら解決しませんし、その分もっと苦しくなります。これが、この20年間の大きな分岐点だったと思います。

病名の無酸素脳症からの若年認知症(当時は痴呆と呼んだ)

私と介護



状態。専門学校生、高校生、中学生の3人の子どものこと、京都の自宅から神戸の職場までの遠距離通勤、なにより職場には率直なお願いをするなど、プライバシーをさらけ出さないと相手は理解納得してくれません。そこから変化が生まれます。「少

近刊『私と介護』(新日本出版社、2017)



胸襟を開いて

会社員 **富田秀信** さん

しの時間なら、千代野さんを看れます」「特例でウチの施設でこの曜日のこの時間なら来てもらっていいです」「勤務状態をこう工夫しよう」等、福祉施設、職場、学校などからさまざまな知恵が集まり始めます。それが、若年認知症、男性介護、介護と仕事の両立といった問題を、目の前の相手が知り、他の人々に知らせていくことになります。問題の共有は、一介の家族の支援から、その問題で苦しむ多くの家族への視線に変わり、社会問題としてメディアも気づき始めます。

散歩や交通機関を使った外出時は妻の手を引いて歩きます。当然すれ違った人の冷やかな視線や嘲笑も受けます。当時、50歳前後の夫婦のこの光景は、TVCMの世界でしか人々は見たことがありませんから仕方ないのでしょう。そして妻の胸には「障害者です。ご協力下さい。富田千代野」のプレート。20年間続いています。夫婦が発信し続けたこのスタイルが今、障害、医療、福祉などで悩む人々の声を受信するようになりました。「一人で悩まんと、富田さんに相談したらエエ」と。20年前の胸襟は、今活かされています。

とみた ひでのぶ／1950年生まれ。1996年春に妻の千代野さんが心臓発作で倒れ、記憶障害などの後遺症が残った。著書に『千代野ノート』(かもがわ出版、2016)など。

*2016年12月19日、千代野さんは心筋梗塞のため急逝されました。

心よりお悔やみ申し上げます。(編集部)